

## エゴイズムの二面性

梶 川 忠

### Deux Aspects de l'Egoïsme

Tadashi KAJIKAWA

Romancier du couple, Jacques Chardonne (1884-1968) examinait les multiples variations de la météorologie conjugale. L'amour "inscrit dans la durée" est un sentiment beaucoup plus vrai et riche que la passion. *Romanesques* (1937), un de ses plus célèbres romans, traite l'égoïsme de l'époux et vérifie que l'amour passionné du couple ne s'accomplit jamais.

ひとりのブルジョア階級の男が、三十八歳の時に十歳年下の女性と結婚した。一家を支えるために、がむしゃらに働かねばならない人間ではない。男は妻を愛し、妻に愛され、妻に熱中する。家夫長の権威を前面に押し出し、妻を人形扱いし、完全に自分の掌中におさめようとする。それこそが夫婦の愛だと信じて。

私は何人もの貞節な男女を、幸福な所帯を見てきた。もっともしばしばみられるものは、(……)とても美しい情緒、いやむしろ夫婦の人格が消えてしまうような一片の雲を形づくっている共同生活である。(p.37) <sup>(1)</sup>

J'ai vu des hommes et des femmes fidèles, des ménages heureux. Le plus souvent, (……) c'est la vie en commun qui a formé de si beaux sentiments, ou plutôt un nuage où la personne des époux disparaît :

いったん家庭というものが成立すると、そこでは熱烈な愛情に静謐な信頼がとってかわるものである。むきだしの個を押しつけ合う愛情の炎は、家庭では鎮火する。「相手に対する強烈な意識」(ibid.) «une vive conscience de son objet» をもちきたす愛を、夫婦の中心にすえたならば、その関係ははたして持続できるのだろうか。しかも男が家夫長として己れのエゴイズムを発揮するなら、女はどうすべきなのか。

これまでの拙稿で取り扱った『エヴァ』と『クレール』<sup>(2)</sup>は、夫の手記という体裁で、男の側からのみ、こうした愛が分析された。互いを強く意識する愛を夫婦関係に維持しようとして、ともに失敗した。

しかし今回問題にするジャック・シャルドヌ(Jacques Chardonne, 1884—1968)の『ロマネスク』(*Romanesques*, 1937)は、同じような夫婦関係を扱っていても、趣向が異なっている。手記のもつ主観性を排除し、夫の友人である「私」という第三者が報告するのである。「私」は、夫オクターヴの考察や愚痴を聞いたり、妻アルマンドの意見に耳を傾けたり、彼女を観察したりする。語り手である「私」は、だから十七世紀のフランス古典劇にみられるコンフィダン(主要人物の打明け話の聴き役)にもなっているのである。

本稿の第一章では、夫と妻の10年以上にわたる緊張関係がどのようなものか、が考察される。第二章では、そこからの脱出の試みと失敗が分析され、「夫婦小説の作家」といわれるシャルドヌが、夫婦愛のパラドックスを描いていることがわかる。

ところで『ロマネスク』というタイトルであるが、勿論「ロマネスクな人々」の意味である。だがロマネスクを日本語におきかえようとするとなかなか難しい。空想的、伝奇的、非現実的、浮世離れ、夢を追うなどと、一応の意味は与えられるが、しかし日本語の「世間を離れた」というニュアンスはない。むしろ現実の中に理想を追求する積極的な態度なのである。

## I

オクターヴとアルマンドの愛情関係には、ふたつの段階がある。生身の人間である妻を夫が無視し、自分のイメージを押しつける。そういう強烈なエゴイズムに妻は翻弄され、互いに愛しあいながらも、緊張しつづけの日々を生きている第一段階。その第一段階を打破すべく夫が動きはじめる第二段階。『ロマネスク』の七割までが前段階に費されているので、この章では第一段階のふたりの関係が考察される。

四十近くまで独身生活をつづけていた男が、一度結婚に失敗した女に出会ったとき、雷にうたれたようにふたりは互いに惚れてしまう。

そうなると、もうわたくしには、その幸福とその責苦のほかには、もう何もありませんでした、一瞬の安らぎも与えてくれないその恋のほかには。夜になるとオクターヴのいったことを繰り返しては、あらゆる意味を引き出そう、一身同体になろう、もうわたくしではない人間、わたくしたちふたりからわたくしがつくる人間になろうとしました。(p.157)

Rien n'exista plus pour moi que ce bonheur et ce tourment, cet amour qui ne me laissait plus de repos. La nuit je me répétais les paroles d'Octave pour en extraire tout le sens, l'incorporer et devenir un être qui n'était plus moi, mais celui que je formais de nous deux.

第三章に挿入されたアルマンドの手記があきらかにするこの出会い以来、「一瞬の安らぎも与えてくれないその恋」(ibid) «cet amour qui ne me laissait plus de repos» を、ふたりは十二年にわたって持続しようと努めている。燃えあがったものは、燃えつきれば鎮静する。だがふたりの愛に焼尽はありえない。だから強い喜びと同時に強烈な苦痛を感じつづけざるをえない。「自分が捕らわれてしまったドラマを思い知りました。」(ibid.) «je sentis le drame où j'étais prise.»

そして「私」にこの手記を渡したアルマンドは、この恋の感動をこう記している。

わたくしはあの人に何ひとつ与えず、あらゆるも

のをもらいました。善意と愛そのものであるあの  
人から、そのたったひとつの富を奪い取ることは  
できません。別れるよりは、死んだ方がましでし  
ょう。(p.158)

Je ne lui donnais rien ; je recevais tout. On ne peut enlever à un homme qui n'est que bonté et amour sa seule richesse. Plutôt que de le quitter, j'aurais préféré mourir.

あらかじめ言ってしまうと、この手記の中で必ずしもアルマンドが本音と話しているわけではない。あるいはこう言い換えようか。本音を無理に押さえつけた結果、本当の自分は失われ、建前が本音になってしまっている。第二段階のある出来事にショックを受けたアルマンドが、十二年の結婚生活を、回復したときに脳裏から消し去っていることから窺えよう。新婚時代まで時間を後退させてしまうのだ。

それではオクターヴとアルマンドの心理的な動きはどのようなものであったのか。小説が開始されるとすぐ、以前筆相学にこっていた「私」の、筆蹟をとおしたオクターヴ像が語られている。

『この力強い筆蹟は、非常な生活力、独創的な気質、善い心、はっきりとたくましい知力、いささかの自尊心、オブチズムを示している。しかしこれは本質的に生活不適應な気質である。(……) 現実感覚と節度が欠けているのだ。動的な性質が過度に刺激されると、神経質で衝動的な筆者はまったく無分別な行動をとるかもしれない。(p.22)

«Cette forte écriture montre une grande vitalité, un tempérament original, un coeur bon, une intelligence claire et vigoureuse, de l'orgueil et de l'optimisme. Mais c'est une nature foncièrement inadaptée. (……) L'esprit pratique et la mesure manquent. Le dynamisme surexcité emporterait le nerveux et impulsif scripteur loin de toute sagesse.

オクターヴのこのような性格から判断すれば、夫婦生活にすべてを投げ入れてしまう。自分の経営する出版社を友人に託し、自分は一介の属託になる。アルマンドとふたりでパリの近郊に逼塞し、自宅で

持ち込み原稿を判断する以外は、一日中妻と向き合って生きるのである。

普通の場合には、家庭をもった男女は、夫と妻という役割のみを分担する人間になる。互いの男性や女性に対する意識はうすれ、関心を払わなくなる。そのような一般的な夫婦関係を、オクターヴは断固拒絶するのである。「オクターヴとアルマンドは、愛の不在を隠すようなペールをかなぐり捨てていた。」

(p.37) «Octave et Armande avaient supprimé les voiles qui cachent l'absence de l'amour.» いつも相手に対する強烈な意識をもってしまふ愛を、十二年にわたって持続したのである。

オクターヴは恋する人になっていた。(……)初め私には、こんなに幸福な出会が彼を友人たちから、日常習慣から、店から引き離して、ついには彼を破滅させたということが納得できなかった。彼が進んで田舎に引きこんだことを語ったとき、「アルマンドが大好きなんだ」と言いたがっているのを、口調で理解した。(……)彼はその女性のためにすべてを投げ捨ててしまっているのだ。(pp.36-7)

Octave était devenu un amoureux. (……) Je ne m'expliquais pas tout d'abord qu'une rencontre si heureuse l'eût arraché à ses amis, à ses habitudes, à sa maison, pour le ruiner enfin. Quand il me parlait de sa retraite volontaire, je comprenais à son accent qu'il voulait dire: j'aime Armande. (……) Il avait tout abandonné pour elle.

自分たちの愛を護るために、世間との交渉を絶ち、隠遁生活をよしとする。狭雑物を拒否し、純粋な愛にのみ関心を集中する。有閑階級に許された特権である。「彼らは自分たちの愛情をいつも考えて、最初の姿を諦めようとはしないのだ。」(p.38) «ils jugent leur sentiment et ne renoncent pas à sa forme première.» 彼らがふたりだけの生活を維持するよう努めるのは、空間的に外在物を拒否するばかりでなく、世間を流れる時間を拒否するためであることがわかる。パリ郊外の一家庭では時間が密閉され、真空パックがほどこされている。

だが時間を固定し、ひたすら互いの内面を覗きこ

もうとする(相手の愛情のうつろいを恐れるのだ)生活、生の流動を認めない生活には、死の腐臭が漂いだすのではないだろうか。

「私」は、幼馴染のオクターヴと十数年ぶりに再会して、近況を語りあううちに、ふたりが近所に住んでいること、オクターヴが結婚していることを知る。そして中年夫婦の異様な生活を知るにつれ、大きな興味をいだいてしまう。

私の好奇心を刺激したのは、ふたりがそのような例外的な境遇にどれくらい馴染んでいるかということだった。清純な恋愛の発端を知ることはできないが、私の興味をひいたのは、その持続である。(ibid.)

J'étais curieux de savoir comment deux êtres s'accommodent d'une situation si exceptionnelle. Je ne connaîtrais pas le commencement de l'idylle, mais c'est sa durée qui m'intéressait.

こうして「私」は密閉状況に風穴をあける使命を、オクターヴから依頼されることになる。前二稿で扱った『エヴァ』と『クレール』も、金銭的な苦勞のないブルジョア夫婦の、ふたり向い合った生活を描いていた。この二作が夫の視点からのみ生活のみていたのに対して、『ロマネスク』の大きな特徴である「私」の介入がここに設定された。

アルマンドの第一印象は、きわめて自然体で生きているということであった。だが密閉生活に窒息しかけ、夫の愛情の変化を嘆く(自分の愛情は不変だと固く信じている)姿が、徐々に明らかになる。夫オクターヴも同様の状態なのだが、こういう生活が夫の築きあげたものだけに、圧迫感を妻の方はよけいに覚えているのだ。いわば夫のエゴイズムによって変形させられ、本当の自分をほとんど失っているのである。

「あの人はとてもエゴイストでしたの……自分のことしか考えなかったんです」

「もちろん、あなたを愛しているから、自分のことしか考えられなかったんですよ」

「とても冷たくって……あの人がわたくしのためにすべてを投げ捨てたとおっしゃいますが、あの人が面と向ってしてくれるとは、全然感じたこと

がありません……おまけに、あの人にはこちらが何かを与えようとしても無理なんです!……」  
(pp.81-2)

— Il était si égoïste. . . Il ne pensait qu'à lui.  
— Bien sûr, il vous aimait, il ne pensait qu'à lui.

— Si froid. . . Vous dites qu'il a tout quitté pour moi, mais je ne l'ai jamais senti présent. . . Et puis cet homme à qui on ne peut rien donner! . . .

妻をむさぼりつくし、抜殻にしてしまうような夫の圧迫に対抗するため、アルマンドは、刺激過多ゆえの無感動を身につけざるをえなくなる。

「(……)わたくしは自分を押えつけ、ひとりで床につくことを覚えました。あの人をうるさがらせないように、自分の愛情を黙らせました。孤独の味や、枕をぬらす涙や、死にたくなるような気持を知りました。結局自分を殺して、こんな石のような女になってしまいました。」(p.82)

— (……) j'ai appris à me contraindre, à dormir seule; j'ai fait taire mon amour pour ne pas l'importuner; j'ai connu le délaissement, les larmes dans l'oreiller, l'envie de mourir, et je me suis repliée enfin pour devenir cette pierre.

そしてこのような自衛手段としての妻の冷淡が、今度はまた夫をいらだたせ、硬化させる。自分の努力に対するに薄情をもってするとは、妻の愛情がもう失われたのではないのか。

「崇高な愛をぼくにささげたと、あの女は君にいうかもしれない、だがその愛された男とは、断じてぼくではない。(……)相手を決してあるがままにみないというのは、哀しいことだよ……残念なことだ。結局こうした空想的な女というものは、また注意力が散漫な人間なんだ。ぼくがアルマンドにしてやったことは、いっさいあの女にはわかっていないんだ。(pp.83-4)

— Elle te dira qu'elle m'a aimé d'un amour

suprême, seulement cet homme aimé ce n'était pas moi. (……) C'est triste de n'être jamais vu tel qu'on est. . . c'est dommage. Au fond, ces imaginatives sont des inconscientes. Tout ce que j'ai fait pour Armande, elle ne l'a pas vu.

このアルマンド評はそっくりオクターヴにも当てはまる。現実には根をおろさず、浮世離れをしたふたりは、おのれの愛情にばかり目を奪われ、相手を決してみようとはしないのだ。現実を直視できず、おのれの観念の自己増殖に、かえって打ち負かされてしまう。こうして互いを、自分流に意識し求めすぎから、ふたりは互いに孤立感を深めている。

このまま愛の第一段階をつづけたなら、青息吐息のふたりは窒息していたことだろう。前に扱った『エヴァ』や『クレール』の夫婦が、前者は妻の逃亡、後者は妻の突然死で悲劇的終結を迎えたように、ふたりの関係は破壊されたことだろう。

密閉空間に「私」を受け入れたオクターヴの意図も、だから緊張関係を弛めるためであった。ふたりは「私」に自分の意見、相手に対する不満を話すことで、「私」とおして互いを理解しようとする。直接向い合う関係から間接的なものにかえるのである。

そして互いの愛情を確認はしたものの、その停滞は避け、方向づけをするべきであると、オクターヴは悟る。

この数週間たえず繰り返している想念。おれはアルマンドを圧制してしまった。どうやったら本当の顔を取り戻させられるだろう。おれがあんな女をすっかり変えてしまったので、もうあんな女は自分の欲求や本性がわからなくなっている。(p.179)

l'idée qu'il ressassait depuis des semaines : « J'ai opprimé Armande. Comment lui restituer son visage véritable? Je l'ai à ce point transformée qu'elle ne connaît plus ses besoins et sa nature. »

「男というものは、エゴイズムや、事なかれ主義や、原則にとらわれて、愚かな生き物だよ。そうして愛する妻を殺してしまうのだ。男性の支配によって萎縮させられたり、ゆがめられたりしていない、生きて女性の与える喜びを、男は知らない

のだ」(p.206)

— Les hommes sont bêtes avec leur égoïsme, leur sécurité, leurs principes ! Ils tuent la femme qu'ils aiment. Ils ne connaissent pas la joie que donne un être vivant qui n'est pas étriqué et faussé par la domination masculine.

自分の愛情の押し売りをやめ、自分のアルマンド像に執着することなく、逼塞状況から妻を解放してやろうとする。そしていったん方向が定まると、現実感覚に欠けるオクターヴは勢いよく突進しだすのである。

## II

第二段階は第一段階と正反対の様相を呈している。自己のエゴイズムで家庭を染めあげ、現実の妻をみようともしなかったオクターヴが、自己放下によって、アルマンドをはばたかせ、自由にふるまわせようとするのである。「ある人間の本性を見抜き、進むべき道を開いてやり、自分のことは忘れてその人の生活を豊かにする。ここにこそ本当の愛の陶醉がある。」(p.194) «Pénétrer la nature d'un être, lui ouvrir ses voies, augmenter sa vie en s'oubliant soi-même, voilà l'ivresse du véritable amour.»

だがどうやって。火に近づきすぎて、遠ざかりたいのだが、魅入られたように身動きできなくなってしまふ。そんなときには「人間を急に変貌させる魔法つかい、秘薬、信仰」<sup>9)</sup>«des sorciers, des drogues, des croyances qui transfigurent un être subitement.»が必要である。例えばアルマンドの関心を他のものに向けさせる秘薬である。

「わかるだろ、美人に近づいてはならないんだ。この果実はつやつやして、どれほどの滋味を内にたたえているだろうと想像をそそるけれど、決してその味を知ることはないのさ」(p.103)

— Tu m'entends : on n'approche pas d'une belle femme. Ce fruit éclatant et plein de promesse, tu n'en connaîtras jamais le goût !

「私」に対する、オクターヴのこの謎めいた言葉は、まるで妻に近づけるものならやってみると、そ

そのかしているようだ。親友である「私」を単なる confident から行動する人間に変えようというのだろうか。いや自分の考えを押しつけるなら、今までと何も違いはしない。アルマンドを観察し、彼女の行動や態度や意見を考慮しなければならない。「『わたくしの好きなのは青春だけです。若者たちの中にと、自由を覚えます。何ひとつわたくしを傷つけるものはないとわかっていますから』」(p.71)

«— Je n'aime que la jeunesse ! Au milieu des jeunes je me sens libre, je sais que rien ne pourra me heurter.» 夫とは正反対の存在である若者が、アルマンドの好みなのである。上記のアルマンドの意見は、生活を尊重し、少しずつ成熟するのをよしとする「私」に反対したときのものである。もちろんこの青春は人生の一時期を意味するのではない。オクターヴと傾向の似ている彼女には、持続する青春のことである。あるいは時間を無視しがちな彼女には、いつでも飛びこめる精神状態といおうか。そしてさらに十二年間家庭内に閉じこもり、歪められてしまったアルマンドは、「生活の烙印を押され」(pp. 111—2) «marqués par la vie» ておらず、「まだ形のきまっていないもの」(p.112) «ce qui est encore informe»を必要としているのだ。

だからテニス仲間の青年ラウル・バップが選ばれる。もし子供がいたら、自分の子供と同じような年齢、十八歳の青年にアルマンドは夢中になる。母性と女性の混った愛情をそそぎこみ、以前とは違ってかわり、生き生きとしてくる。

「自分そのもの、好み、神経などを忘れて、与えること。相手が盲らで、何を受け取っているのか考えもしないと、わたくしの自分ももう存在しません。(……)わたくしを子供っばいとお思いでしょうね……ええ……わたくし15歳なんです。もう思い出なんぞなく、いっしょに出かける時にはもう人生のことなどすっかり忘れております」(p. 198)

— Donner, en oubliant sa propre personne, ses préférences, ses nerfs. . . Ne plus exister soi-même parce que l'autre est aveugle et ne se doute pas de ce qu'il reçoit. (……) Vous me trouvez puérile. . . oui. . . j'ai quinze ans, je n'ai plus de souvenirs, je ne sais plus rien de la vie

quand nous partons ensemble.

アルマンドが軽やかに変身し生まれかわったのに対し、オクターヴは異なっていた。彼は人間の変化を信ずることができないのだ。「人間というものはほとんど変化しない。生まれれば、絶対にひとりの人間しかいないのだ。」(p.32) «L'homme change très peu. . . Il n'y a jamais eu qu'un homme sur terre. . .» という固定観念の主である。変化したようにみえても、彼にとっては「照明の具合」(pp.32-3) «une nuance dans l'éclairage» がちょっと違っただけなのである。だからバップとの交際でもアルマンドには変化が訪れないはずであった。彼の腕の中でのみ妻は動くはずであった。

だが夫への愛を失ってはいないのかもしれないが、アルマンドは予想を越える変貌をとげてしまった。十代の娘に戻ったかのように生気を漂わせている。自分からけしかけたのにもかかわらず、オクターヴは嫉妬にかられてしまうのである。

オクターヴも私にはまったく違ってみえた。かつての怒りが消滅し、一種の興奮状態、むしろアルマンドの強迫観念がそれにとってかわった。(pp.193-4)

Lui aussi me parut tout différent. Ses colères d'antan avaient disparu, remplacées par une certaine excitation, ou plutôt par la hantise d'Armande.

「わからないのかい、もしあいつが少しでもぼくを愛しているのなら、他人とあんなににこにこ笑えるはずがない、他人に我慢できるはずがないってことを」(p.218)

— Tu ne comprends pas que si elle avait pour moi le moindre amour, elle ne pourrait pas tant sourire avec les autres, elle ne pourrait pas les supporter !

こうして嫉妬に狂ったオクターヴは、今までと異なりいつも黙って外出し、ことさらにアルマンドを無視しようとする。第一段階がいつも向き合っている夫婦であるのに、第二段階では互いに背を向けて

いるのである。

この状態に変化をもたらすのは、作中におきるたったひとつの事件である。少しも明確に書かれておらず漠然としているのだが、オクターヴが自殺めいた行動をとるのである。今までやったことのない行動である。妻のお気に入りのバップが所有するボートに乗って(不審なふるまいである)、セーヌ川にこぎ出すのである。ただの散歩だったのかもしれないが、尋常ではない行動にアルマンドは自殺行為だと信じる。

勿論シャルドンヌの作品である以上、オクターヴは無事なのであるが、捜索中に今度はアルマンドが失踪し、精神に異常を生じた状態で発見されるのである。

この事件の最中に、バップという青年の特質がわかる。アルマンド、オクターヴは勿論、「私」も浮世離れしているのに対し、この青年は際立った対照をみせているのである。きわめて現実的で要領がいいこの青年は、特にオクターヴとエゴイズムという点で、くっきりと違いをみせる。オクターヴが溺れているのではないかとみんなが心配している時に、彼のみは自分のボートがなくなること気にしている。さらにアルマンドがひょっとしたら事故をおこしたのでは、と人々が動転している時、帰宅が遅くなったら両親にしかられると、その場をひとりだけ去ってしまうのである。

しかしバップが結果的にオクターヴをみつけたのであるし、アルマンドも発見されたのだから、彼のエゴイズムはむしろ無邪気で健全というべきであろう。この点で、オクターヴの他人を傷つける陰湿なエゴイズムと、非常に異なっているのである。

結局『ロマネスク』は、エゴイズムが他人に及ぶ時に生じる不幸を追求した小説をいえるだろう。『エヴァ』の言葉「ひとりの女がひとりの男に与える幸福」<sup>(4)</sup> «Le bonheur qu'une femme peut donner à un homme» をもじっていうなら、幸福になれかしと願いつつ、ひとりの男がひとりの女に与える不幸を扱っているといえるだろう。

バップのエゴイズムが個人的なレベルであったのに、オクターヴのそれは夫婦関係のレベルにある。つまり男と女が出会って、家庭をつくったとき、家庭の幸福に執着し、それを維持しようとするれば、あらゆる罪を犯すのである。夫婦愛を追求しつつ、シャルドンヌはいわばその不可能を証明しているの

だといえよう。

〔注〕

1. テキストは Stock 版 (1937) を用い、該当ページののみを示す。
2. 『エヴァ』は、愛知工業大学“研究報告” No.22, pp.29~34, 1987.  
『クレール』は、同上 No.23, pp.13~19, 1988.
3. J. Chardonne: *Eva*, p. 85, Albin Michel, 1983.
4. 同 上, pp.150—1,

なお、各種文学史の一節や評論集の一部で取り扱われることはあっても、シャルドンヌに一冊をあてた書物は以下の三冊だけである。

GUITARD-AUVISTE (G.): *La Vie de Jacques Chardonne et son art*, Grasset, 1953.

—: *Jacques Chardonne ou l'incandescence sous le givre*, Olivier Orban, 1984.

VANDROMME (Pol): *Jacques Chardonne, c'est beaucoup plus que Chardonne*, Vitte, 1962.

(受理 平成元年1月25日)